

大丈夫よ！ お母さん！

vol.24

教育コーディネーター 中西美沙子



(今回のテーマ)

匂い立つ、 自然に向かって

「緑に染まる」。初夏を表すこの言葉から感じるものは、自然によって人は生かされているという感覚です。「匂い立つ」も、そうです。日本人は五感を、「染まる」や「匂い立つ」などとデリケートに表現しました。まるで自然に対するプレゼントのように。

私たちは自然の恩恵を大切にしてきたのだろうか。時々思うことがあります。ギリシヤ神話にプロメテウスの物語があります。プロメテウスは、人間に火を与えた神さま。火の象徴は科学で、文明の進歩もそこにあります。それまで人は、自然とともにありました。でも科学の進歩で、自然を人間は追いやるようになりました。経済の発展もそうして得られたのです。しかし失ったものもたくさんあります。「人への思い」は、自然への関心から生まれると私は考えていますが、その感覚は今では薄くなっているようです。

わが家の小さな庭に、今年もバラが咲き

ました。2年前に亡くなった母が丹精したものです。その庭を、私は「小さな宇宙」のように感じます。山吹(やまぶき)。空木(うつぎ)。紫陽花(あじさい)。蘇芳(すおう)。季節の花々が、寄り添うように咲くのです。

手をかけるほど、花はそれに応えるように咲きます。それは「慰め」や「希望」という言葉とどこか似ています。人はつらい現実にあつたとき、無意識に自然の中に立ちつくそうとします。母が「ほら。みてごらん」とバラの花を指さすその声の中に、生きてきた人生の、かなしみと喜びの時の交差を感じました。

私の文章教室にも、自然を楽しむ子たちが何人もいます。彼らはなぜか、とても優しい。3人の兄弟はボイスカウトに参加しています。野外活動で、自然とともに生きることや、人間であることの自活をする体験をしています。「火をどのようにおこすか」「その火を使ってどんな行動をとる

のか」などを学ぶのです。今の子どもたちは、どこか受け身です。生活の基本の中に「自らすること」が少なくなっているからでしょうか。

私の高校教師時代に「マッチを擦ったことがない」子がいました。大切に育てられすぎ、彼はあらゆる場面で判断をすることができませんでした。親がすべてやってくれるから、その必要がなかったのです。「マッチを擦れない」ことは「火の熱さも想像できない」ことです。でも、彼のケースは特殊ではないと、私には思えました。今の子どもも多くが、「自らすること」を失っているからです。

目を開けば自然はどこにでもあります。風の匂い。木々のざわめき。虫や小さな生き物たち。子どもたちは本来、自然が大好き。教室の庭でだんご虫をみついたり、秋になるとミズナラの実のドングリを拾って、大笑いをします。私はそのような驚きを大切に思っています。それは、自然に対する好奇心が「心を育てること」になると考えるからです。

プロメテウスは火を人間に与えたことで、ゼウスの怒りをかいます。重い罰。それは生きたまま肝臓をワシに食べられる、という刑です。一日がたてば肝臓は再生され、またワシによって食べられるのです。この神話には、「自然を奪った人間」への戒めがあります。それは人が自然によって罰せられることを意味します。

どこでも自然は人々を待っています。奪うものではなく、ともにあることにさえ気づけば。

Profile

教育コーディネーター
中西美沙子

執筆・講演活動のかたわら、様々な部門の文化事業を展開する「(株)クレアシオン」の代表。文章教室「スコレ」画廊「キューブブルー」「建築プロデュースすまい」「ときわ薬局」など。文章教室は書き方を教えるだけでなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

☎ tel 053-456-3770

中西美沙子

検索



ピアノシモでね

中西美沙子 著



著書の「ピアノシモでね」(東京書籍)は、中日新聞に連載された人気コラム「つかまえて!こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。(税込1,500円)

※お求めは浜松市内の谷島屋で。